

日韓關係雜攷

鏡山, 猛

<https://doi.org/10.15017/2344393>

出版情報 : 史淵. 13, pp.131-158, 1936-07-20. 九州帝国大学法文学部
バージョン :
権利関係 :



日韓關係雜攷

鏡山猛

一 任那の滅亡に就いて

三國時代の下韓十二國は晉の時代に於ては任那加羅の名を以て史乘に現はれて來る。その確實な初見は好太王碑文に「任那加羅安羅」の名が見えてゐる。馬韓が百濟國によつて統一され辰韓が新羅國で代表されると異り、下韓は依然加羅諸國の對立であり國家統一の氣運は他の兩韓國に比して最も遅れてゐた。この頃任那諸國が我が國の支配の下に置かれてゐた事はこれ等の小國の統合をさまたげる主な原因となつてゐたであらう。任那諸國は或は神功紀に七國を列擧し、欽明紀には十國を擧げ總じて任那と云ふとある。

神功皇后四十九年の條「因以平定比自林、南加羅、喙國、安羅、多羅、卓淳、加羅七國」

欽明天皇二十三年の條註記「總言任那別言加羅、安羅、斯二岐、多羅、率麻、古嗟、子他國、散半下國、乞滄國、稔禮國合十國也」

朝鮮の史料に傳ふる所によれば五伽耶と云ふ。

三國遺事五伽耶「阿羅耶一作加耶古寧伽耶今咸安 大伽耶星山伽耶小伽耶今同前星山城 又本朝史畧言太祖天福五年

庚子改五伽耶名一金海二古寧爲加利縣三非火今昌寧高靈之託餘二阿羅星山同前星山或作碧珍伽耶

三國遺事所引の駕羅國記には、六伽耶の稱がある。任那諸國は各國家の勢力關係が歴史的に動いてゐる筈であるから、かゝる十伽羅、六伽羅、五伽羅の名の示す如く其の時々によつて數も異つてゐたと思はれる。然し後世五伽羅の數に捉はれて遺事の著者は、本朝史畧に金官伽羅を擧げ伽羅を脱してゐる事を伽耶國記によつて批難してゐる。五伽耶の國家發生の傳説は三國遺事に畧文を載せてゐるが駕羅國記に詳である。駕羅國記は遺事に註記する如く高麗の文廟朝金官知州事文人の撰ぶ書である。本文中に「建安四年己卯始造。逮今上御圖三十一載大康二年丙辰。凡八百七十八年」とあれば文宗の三十年、我國の白河天皇承保三年に當る撰述と思はれる。駕羅國記によれば五伽羅の起源を次の如く説明してゐる。

開闢之後。此地未有邦國之號。亦無君臣之稱。越有我刀干、汝刀干、彼刀干、五刀干、留水干、留天干、神天干、五天干、神鬼干、等九干者。是酋長。領總百姓、凡一百戶、七万五千人。多以自都山野。鑿井而飲。耕田而食。屬後漢世祖光武帝建武十八年壬寅三月禳洛之日。所居北龜旨是龜旨之稱。若十朋伏之狀。故云也有殊常聲氣。呼喚衆庶。二三百人集會於此。有如人音。隱其形、而發其音曰。此有人否。九干等云。吾徒在。又曰。吾所在爲何。對云。龜旨也。又曰。皇天所以命我者。御是處。惟新家邦。

爲君后。爲茲故降矣。備等須掘峯頂撮土、歌云。龜何龜何、首冥現也、若不現也、燔灼而喫也。以之踏舞。則是迎大王。歡喜踴躍之也。九干等如其言。感忻而歌舞。未幾仰而觀之。唯紫繩自天垂而着地。尋繩之下。乃見紅幅裏金合子。開而視之。有黃金卵六。圓如日者。衆人悉皆驚喜。俱伸百拜。尋還。裹著抱持、而歸我刀家。寘榻上。其衆各散。過浹辰。翌日平明衆庶復相聚集開合。而六卵化爲童子。容貌甚偉。仍坐於床。衆庶拜賀。盡恭敬止。日日而大。踰十餘晨昏。身長九尺則殷之天乙。顏如龍焉、則漢高祖。眉之八彩、則有唐之高。眼之重瞳、則有虞之舜。其於月望日即位也。始現故諱首露。或云首陵。首陵是崩後說也崩國稱大駕洛。又稱伽耶國即六伽耶一也。餘五人各歸爲五伽耶主。

かゝる卵生傳説は高句麗始祖傳説（〔高句麗好太王碑〕惟昔始祖鄒牟王之創基也。出自北夫餘。天帝之子。母河伯女郎。剖卵降出生子。）と似て又新羅の始祖傳説と相似のものである。新羅王の始祖朴氏及び昔氏は卵生である事は三國史記が傳へてゐる。伽羅國始祖の卵生説も伽羅國固有のものであつたかは猶考究の餘地がある。而し金卵より出でたる故に金氏を稱すると云ふも元來伽羅國王を金姓と稱した確證はない。かゝる傳説は恐らく金官伽羅が新羅に併合された後に於て新羅國の影響を受けて作られた傳説ではあるまいか。新羅國王の金姓を稱するも眞興王以前に遡る事は出来ない。梁書にも法興王は慕明秦と呼ばれ金姓も附せず次の眞興王に至つて始めて金眞興と呼ばれてゐる。新羅の姓を稱ふるに至つたのは金官伽羅併合後の事でありそれ以前伽羅王が金姓を稱ふる事は考へられない。然るに卵生傳説と異つた説話の片鱗が見出される。それは東國輿地勝覽に引く所の崔致遠撰の釋利貞傳

の逸文である。伽羅山神正見母主乃爲天神夷毗珂之所感生大伽耶王惱室朱日金官國王惱室青裔二人
右は山神感天所生の傳説である。天降傳説は三國史記の金度信傳にも現はれてゐる。

〔三國史記〕金度信傳。十二世祖首露。不知何許人也。以後漢建武十八年壬寅。登龜峯望駕洛九村
遂至其地開國。號曰加耶。後改爲金官國。

又新羅國王族金氏に付いても同様に天降傳説がある。その史料は新羅文武王陵の碑文（海東金石苑
所載原碑石は今散逸す）である。

□□十五代祖星漢王降質圓穹誕靈仙岳肇臨大王思術深長風姿英拔
しかるに三國史記は金氏の發生を脫解尼師今の世とし次の如く述べてゐる。

九年春三月。王夜聞金城西始林樹間。有鷄鳴聲。遲明遣瓠公視之。有金色小積。掛樹枝。白鷄鳴於
其下。瓠公還告。王使人取瓠開之。有小男兒在其中。姿容奇偉。上喜謂左右曰。此豈非天遺我以令

胤乎。乃收養之。及長。聰明多智略。乃名閼智。以其出於金積姓金氏。改始林名鷄林。因以爲國號。

文武王陵碑が始祖を十五世の祖星漢王とするに對し三國史記は更に遡つて星漢の父を金閼智とし昔
氏の始祖脫解王の御世の事に結びつけてゐる。文武王陵碑文は王の歿後間もなく書かれたものと考へ
られ古い金氏の傳承として貴重なものである。原始の形に於ては金の示す如く金氏の發生は昔氏と何
等の關係なく傳へられたに相違ない。而して他の昔氏朴氏の始祖も天降説話でなかつたかと思はれる。

李朝世宗實錄の地理志（慶尙道慶州府の條）に土姓六、李崔鄭孫裴師、天降姓三、朴昔金來姓一、康

賜姓一、倭續姓一、楊

この材料は新しいけれども彼の卵生傳説よりも古い倂を傳へてゐるものではなからうか、崔致遠撰の釋利貞傳も駕洛國記に先だつこと百七十餘年である。天降傳説は日本に於ても高天原説話として更に完備した傳説が記紀に見える所である。琉球の開國傳説も同様な事がおもろ草紙に書かれてゐる。恐らく倭韓の民族に通じた古傳説であつたであらう。卵生傳説は後世高句麗の影響によつて附加せられた説話であらう。

伽羅の語は任那の一國を指した狹義の場合と任那諸國を含めた廣義の場合とがある。而も狹義の場合に於ても時代の前後によつて伽羅國は位置を異にした國を呼んでゐる事を注意せねばならぬ。最初に伽羅の名で呼ばれた國は金官伽羅であつて最後のそれは高靈伽羅であつた。この兩國は屢々後世の史料に混同して用ひられてゐる。

三國遺事の駕洛國記は金官伽羅を中心とした説話を傳へこれに間々大伽羅即ち高靈伽耶の傳へを混じてゐる。即ち「國稱大駕洛又稱伽耶國即六伽耶之一也」と云ひ「仇衡王。金氏。正光二年即位。治四十二年。保定二年壬午九月。新羅第二十四君眞興王。興兵薄伐。王使親軍卒彼衆我寡。不堪對戰也。仍遣同氣脫知余叱今。留在於國。王子上孫卒支公等降入新羅」とあるは明かに高靈伽耶の滅亡を述べてゐる記事である。故に編者は議して曰く「案三國史。仇衡以梁中大通四年生王子。納土投羅。則計自首露初即位東漢建武十八年壬寅。至仇衡末王子。得四百九十年矣。若以此記考之。納土在元魏

保定二年壬午。則更三十年。總五百二十年矣。今兩存之。」と即ち金官加耶の滅亡は高靈伽耶のそれに先だつこと三十年である。今の金海地方が古く狹義の加耶國と呼ばれた事は三國史記地理志に「金海小京。古金官國。」一云伽落國。一云伽耶。自始祖首露王至十世仇亥王。以梁中大通四年新羅法興五十九年。率百姓來降。以其地爲金官郡。文武王二十年永隆元年爲小京。景德王改名金海京。今金州。」とあるにより明である。この金海の伽羅國は魏志に現はれてゐる下辰狗耶國の後と思はれ洛東江の河口に當り倭國との交通の要地に當つてゐる。故に魏使倭國に至るや帶方郡よりこの狗耶韓國に寄り對馬國に渡ると記載してゐる。而も狗耶韓國は倭人傳に「其北岸狗耶韓國」とあり又下辰傳には其濱盧國は倭と界を接すと云ひこの半島の一角に倭人の存在してゐた事を暗示してゐる。下韓が伽羅國と稱せらるゝに至つた語源を求むるならばこの狗耶韓國が最初の伽羅國であつたであらう。これが下辰國を代表するに至つた原因はこの地方に於ける倭人の力を考へねばならぬ。辰韓の諸國のうち斯盧國が後の新羅となる折には新羅六村の土着民の上に君主となるべき外來人が入つて來た事を視はしめる物語りがある。彼の天降族の神話がそれを示しその王族の一番氏は倭族と密接な關係を持つてゐる。辨韓も亦新銳の倭人の勢力を得て三韓諸國の中に擡頭して來た。従つて神功紀に現はれてゐるが、加羅國王己本旱岐も亦金官國主に擬せらるべきである。

〔日本書紀〕攝政六十二年。新羅不_レ朝。即年遣_ニ襲津彦_一擊_ニ新羅_一。

百濟記云。壬午年。新羅不_レ奉_ニ專國_一。貴國遣_ニ沙至比蹠_一令_レ討之。新羅人莊_ニ

箭美女二人。迎_ニ蹠於津_一。沙至比蹠受_ニ其美女_一反伐_ニ加羅國_一。加羅國王己本旱岐。及兒百久卒。阿首至。國沙利。伊羅麻酒。爾汝至等。將_ニ其人民_一來奔_ニ百濟_一。百濟厚遇_ニ之_一。

百濟記に云ふ己本旱岐の旱岐は王種の號で己本が其の名である。駕羅國記並に三國遺事王曆によつて仇首王壬午の年に當る王を見ると伊尸品王となつてゐる。尸は尸耶の如くカと同音で己と通ずれば百濟記の己本は伊尸品王の伊が省かれたものと思はれる。我國は最初のうちは金官の加羅國に根據を置き任那諸國に君臨してゐたが金官伽羅は新羅の侵略に依つて我國を離れ新羅に内附した。かくなつた事情については日韓の史書に明記されてゐないが三國史記の新羅本紀に「法興王九年。春三月。加耶國王遣使請婚王以伊淦比助夫之妹送之」とあり、この婚姻は加羅國の運命を決定する重大事件であつた。これより加羅國を捨て我國は安羅國に依つて活動してゐる。

安羅國は早く高句麗好太王時代倭兵を救つて新羅を攻めた強國であつた。

十年庚子（永樂十年）致遣步騎五萬。住救新羅。從男居城。至新羅城。倭滿其中。官兵方至。倭賊

退□□□□□□□□來背急。追至任那加羅。從拔城。城即歸服。安羅人戍兵。拔新羅城□城。倭滿

倭潰城六（十七字欠字）九盡臣□來。安羅人戍兵滿（五十三字欠字）潰□□□□□羅人戍兵」

右の文中安羅人戍兵の句が三ヶ所出てゐるが安羅人戍兵倭と共に新羅□城を抜いた事の他二條は欠文の爲明瞭でないが兎も角當時の加羅諸國中の強國であつた事は疑ひない。魏志に見える卞辰安耶國は即ち安羅國の前身であらう。今の慶尙南道咸安がその故地と推定せられる。即ち三國史記地理志に「咸安郡法興王以大兵滅阿尸良國一云阿郡加耶以其地爲郡景德王改今因之

咸安は金海の西に隣り金海國を失つた我國としてはこれに移るを最も得策とした。書紀によれば繼

體天皇二十三年近江毛野臣を安羅に遣し新羅に奪取された南加羅隊已吞を復せんとした。爾來毛野臣は安羅に居り任那の政を恣にした。金官加耶の滅びてより安羅は任那の地位にあつた。

欽明紀五年にある百濟王上表の文に「夫任那者以安羅爲兄唯從其意安羅人者以日本府爲父。唯從其意」とあり註に引く百濟本紀には「以安羅爲父日本府爲本」とあり加羅の日本府は安羅に移つたのである。然るに安羅も又新羅の侵す所となつた。即ち書紀によれば欽明天皇十五年百濟王上表文に「百濟王臣明及在安羅諸倭臣等任那諸國旱岐奏云々」としてこの頃まで安羅は日本の掌中にあつた事が明かであるが、同二十二年「新羅築城阿羅波斯山以備日本」とあり安羅の滅亡は欽明天皇十五年より二十二年に至る間と思はれる。按ずるに欽明天皇二十三年正月任那の官家が新羅に討滅された條に一本を擧げ「二十一年任那焉」とあるによれば之は恐らく安羅の滅亡を指したものであらう。安羅の滅後日本が依つた最後の任那の國は高靈加耶であつた。高靈加耶は一名大伽耶と稱せられ三國史記地理志によれば「高靈郡本大伽耶國自始祖伊珍阿鼓王一云内珍朱智至道設智王凡十六世五百二十年眞興大王侵滅之以其地爲大加耶郡景德王改名今因之」

而して新羅本紀眞興王二十三年の條に「二十三年九月。伽耶王叛王命異斯夫討之斯多舍副之」とあり、この眞興王二十三年は恰も欽明天皇の二十三年に當り書紀に「欽明天皇二十三年春正月新羅討滅任那官家」とあるに關連ある記事である。其の後も任那の名は書紀に見えてゐるがこれ以後は新羅に併合された後の地方名に過ぎない。

次に高靈伽耶滅亡の事情に就いて考へてみよう。日本書紀によれば繼體天皇の六年百濟國は使を遣し任那の四縣を請ひ是を許されてゐる。次で七年には百濟國は伴跋國が己汶及帶沙を奪へるを告げ之を賜はらん事を乞ひ許されてゐる。こゝに伴跋國は己吞帶沙に城を築き日本に備へ百濟の使者の歸るを途に劫掠した。又繼體天皇二十三年の條には改めてこの帶沙津を百濟に賜はらんとて、百濟王が下哆喇國等穗積押山臣に勅を得て日本に怨を生じ加羅は儻を新羅に結ぶと云ふ、即ち此處に問題となつた帶沙津は三國史記地理志によれば、

「河東郡。本韓多沙郡。景德王改名。今因之。領縣三。省良縣。今金良部曲。獄陽縣。本小多沙縣。景德王改名。今因之。河邑縣。本浦村縣。景德王改名。今未詳」。

とあり、現在慶尙南道河東郡河東面ありその位置は蟾津江の河口に當ればこの地が古の帶沙津である事は疑ひない。神功紀攝政五十年の條に「増賜多沙城爲往還驛」とある。多沙城もこれであるが多沙を百濟に與へ朝貢の路となしたのは恐らく欽明朝の事であらう。神功朝に於ては百濟は漢城に都し我國への交路は海路によつた事と思はれ陸路河東の地まで下つて始めて船にすると考へられない。蓋し蘆王南遷して熊津に遷つてより帶沙津が漸く朝貢路として着目されて來たであらう。而もこの頃、高靈伽耶は新羅に洛東江の口を塞がれた爲蟾津江口に出る路を取つて我國に通つたものと思はれる。この爲に帶沙港は百濟及高靈伽耶の爭奪地となつたのである。書紀に「二十三年春三月。百濟王謂下哆喇國守穗積押山臣曰。夫朝貢使者恒避鳴曲也。俗云美佐那。每苦風波。因茲濕所。實全壞無色。請

以_二加羅多沙津_一爲_二臣朝貢津路_一。」と云ひたるに對し加羅王は「此津從_レ置_二官家_一以來爲_二臣朝貢津涉_一安得輒改賜_二隣國_一。遠_二元所封限地_一。」と抗議してゐる。先に帶沙已汶の地を百濟に與へた爲、日本に抗した伴跋の國は、故今西博士の高説の如く高靈伽耶を指したものと見て誤りあるまい。(今西龍氏加羅境域考)この問題に對しては金官伽羅は多く與らない所である。依つて彼の金海國主が新羅に儼を結んで法興王九年三月加耶國王が伊淦比助夫の妹を遣した記事は高靈伽耶のこととすべしと云ふ意見を述べて居られる。輿地勝覽に慶尙左道高靈の條に崔致遠撰の釋順應傳の逸文が引てあるが「大伽耶國月光太子乃正見十世孫父異腦王求婚新羅迎夷察比枝輩之女生太子」とあり、こゝに比枝輩と比助夫とは同一人であり、一に子女と云ひ一に妹と云ふは何れかゞ二様に語られた結果であるとされてゐる。さりながら猶考ふべきは金海駕洛仇衡王の末裔である。駕洛國記には「仇衡王王妃叱叱水稱叱女桂花生三子一世宗角干二茂力角干三茂得角干」とある。三國史記には「法興王十九年金官國王金仇亥與妃及三子長奴宗中武德季武力以帑寶物來降王禮待之授位上等以東國爲食邑子武力仕至角干」と兩記多少の相異あるも、駕洛國紀は三國史記によつて茂力角干は武力と訂正さるべく武力の名は三國史記に散見してゐる。

「眞興五十四年七月取百濟東北鄙。置新興。以阿淦武力爲軍主。冬十月娶百濟王女爲小妃」

「同十五年七月。修樂明活城。百濟王明禮與加良來攻管山城。軍主角干于德伊淦耽耽等。逆戰失利。

新州軍主金武力以州兵赴之。及交戰」

とあり、加羅投降より二十一年目には武力は新羅第六の官位阿淦を得てゐる。彼の新羅最古の金石文として有名な昌寧眞興王拓境碑によれば眞興王二十二年の建碑にして當時軍に従へる人名をあげたる中に沙喙武力智臣干なる人名がある。智は新羅貴人の名の後に加へらるゝ語で臣干は新羅第三の官位である。武力は彼の眞興十四年より八年の後には戰功により第三級に進んだものである。眞興王碑の在る全羅南道昌寧は神功紀に記す加羅七國中の一國比自焮(三國遺事五伽羅の一に非自焮あり)の故地である事は諸先學の定説である。即ち三國地理志に「火王郡。本比自火郡。一云比眞興十六年置州名下州。二十六年州廢。景德改名。今昌寧郡」とあり武力が伽羅國王の子とすればそれは高靈大伽羅王の子でない事は明である。大伽耶の新羅に合せらるゝのは眞興王二十三年でありその前年に既に武力は新羅の軍に加つて非自焮の順撫に従つてゐるのである。勝覽に引く釋順應傳に見ゆる大伽羅國異腦王が婚を新羅に求め月光太子を産んだと云ふ年代に就ては太子が始祖正見の十世の孫であると云ふより他には明かでないが、上述により金海加羅は伊淦比助夫の妹を入れ大伽羅は夷婁比枝輩の女を容れ二の大伽羅國が血縁を新羅に結んだと考へた方が適當である。この血縁的併合は爾來新羅王朝に任那の後嗣と稱する有爲の人物を出し金海王の後裔は新羅の王族と血を交へるに至るのである。この意味に於て仇衡王の婚は加羅國の併合に當つて最も注意すべき事柄である。

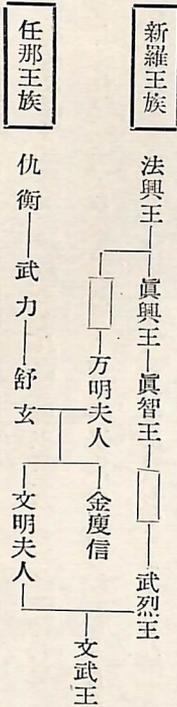
昌寧眞興王拓境碑によれば武力智臣干は沙喙を冠してゐるがこれは新羅六村の一なる沙梁部の人を表すことは明である。猶任那の後と稱する者のうち沙喙部の人と稱する者が多い。

推古天皇十八年任那使沙喙部大舍首智買

三國史記強首傳「強首中原京沙梁人也。(中略)及太宗大王即位。唐使者至傳詔書。其中有難讀處。王召問之。在王前一見。說釋無疑滯。王驚喜恨相見之晚。問其姓名。對曰。臣本任那加良人。名字頭」。

金官金氏が沙梁部と關係を生じた所以は察するに仇衡王に嫁した比助夫の妹の所屬した舊村であつたであらう。任那の後と稱する者に習部に屬したものがあつた。推古天皇十九年任那遣習部大舍親智周智の名が見える。或は大伽羅國に關係ないかと思はれる。

金海加羅國王が金氏を稱するに至るのも、新羅に統合された後に於て初めて考へられる。これが新羅王族と血縁を結んでからは一躍任那の金氏は大姓となり舊來の新羅の王姓金氏に對して新金氏と呼ばれてゐる。新羅末景明王八年建られた慶尙南道昌原の鳳林寺眞鏡大師寶月凌空塔碑には「大師諱審希俗姓新金氏其先任那王族云々」とある。金海金氏が新羅王族を合體した由來は三國史紀金度信傳によつて表示すれば次の如くなる。



文武王の祖は母系より云へば金海國王系となり金首露は其の始祖に當る。

駕洛國記は是を記して「泊新羅第三十王法敏龍朔元年辛酉三月日、有制曰、朕是伽耶國元君九代孫仇衡王之降于當國也所率來子世宗之子率友公之子庶云匣干之女文明皇后寔生我者。茲故元君於幼冲人。乃爲十五代始祖也。」とある。これ彼の文武王陵碑にある「十五代祖星漢王」云々の記事を加羅國祖に附會せんとした説で駕洛國記に従へば首露……仇衡——世宗——率友公——匣干之——文明——文武となり首露は之によつても十四代に當る。十五代の祖が舊新羅王以來の金氏である事は三國史記の記す所である。任那王家は終に新羅王室と血縁關係を生じ殊に母系尊重の舊慣ありし新羅の社會に於ては任那王家の尊仰となり永く兩國の統一を固からしめた。

一 新羅の興起と日唐交通

倭王讚の名を以て支那に通じた履仲天皇以來歴代の支那への通使も我が雄略天皇を最後として我國の支那への外交は彼我の文献には見當らず一時中絶の態にある。我國の支那への誘導をつとめた百濟國は其の後も猶主として支那南朝即ち南齊梁に朝貢して封冊を受けてゐる事は南史梁書に見えてゐるにも拘らず倭國の遣使の記事は見當らない。これ日本の外國文化に對する憧憬の念がうすらいだ事を意味する。我が國の大陸への交渉が絶へんとする頃代つて新羅は漸く頻りに使を大陸に送つてゐる。大陸文化は急激に新羅に入り新興國家の原動力となつた。新羅王の名で初めて使を遣した樓婁以來百

二十七年を経て永平元年北魏に朝貢し、次で普通二年百濟に從つて王募名秦なるものが梁に方物を獻じてゐる（梁書新羅傳）募名秦は即ち法興王であつて次の眞興王代には既に彼の史に金眞興の名が見えてゐる。眞興王二十五年（河靖三年）北齊に通じたのを初めとして二十九年（光大二年）三十一年（大建二年）三十二年（大建三年）に陳に入り三十三年（武平三年）に又北齊に遣使してゐる。而して最初の河靖三年朝貢の翌年には齊は新羅國王金眞興を以て使持節東夷校尉樂浪郡公新羅王と冊命してゐる。（北齊書武成帝記）これ眞興王の最初の遣使であつて眞興王代には以來陳に三回北齊に二回都合五回の通交を保つてゐる。この法興王眞興王兩代に於て新羅は政治文化に目覺しい躍進を遂げてゐる。新羅は半島の東南の一角を占め百濟、高句麗に比し支那との交通にとつては不便な位置にあつた爲外來文化も多く高句麗を通じて入つてゐた。文化も從つて他の二國に比して遅れてゐたが直接支那と交渉を開始するや急激に國家の面目を一新してゐる。三國遺事所載の王曆によれば二十二代智訂麻立干迄を上古とし二十三代法興王以下六代を中古と區別してゐる。而してこの時代區分は新羅國家發展史上まことに當を得た法である。智證王迄は麻立干なる新羅の原語を以て王を稱してゐるが法興王以來は外國風に王と稱してゐる。王の主要な事蹟を擧れば律令を頒示し百官の公服朱紫の秩を制する（即位七年春正月）等内政の整頓が行はれ佛教を擧行し文化の向上を圖つてゐる。（即位十五年）又初めて年號を稱し即位二十三年を建元元年となす。眞興王黃草嶺の建碑文中に□□世道乖眞文化不敷則邪爲交競早以帝王建號莫不脩已以安百姓然朕紹大祖之基業承王位云々の語があり以て太祖法興王の基業

を證する事が出来る。眞興王は法興王の創業を享けて國史の編纂を行ひ、自ら剃髮して熱心な崇佛家であり又この時代に新羅の版圖は急激に擴張した。任那諸國は殆んど新羅に合してゐる。北は咸鏡南道の草黃嶺碑、南は慶尙南道昌寧西は京畿道の北漢山の三拓境碑が最も有力に當時の新羅の外征を物語るものである。新羅の興起任那の喪失は日本にとつて一大脅威であり又傷手であつた。歷朝任那の復興に御軫念ありたるも事成らず新羅とは常に敵對の状態にあつた。新羅の興起は氏族制度の弊に惱まされた日本にとつては一大衝動であつた。彼の聖德太子の政治大化の改新政治も新羅の刺戟が大に預つてゐる事と思はれる。雄略天皇以來中絶の形となつた對外通交を再び始められたのは推古朝聖德太子攝政の御代であつた。書紀によれば推古天皇十五年七月聖德太子が小野臣妹子等を隋に遣はされてゐる。次で十六年再び小野臣妹子使し二十二年六月には犬上御田歙等使し都合三回の遣使がある。又我が記録には見えないが隋の開皇二十年倭使至る由が隋書北史等に見えてゐる。

隋書倭傳（北史もほぼ同文）開皇二十年倭王姓阿每字多利思北孤號阿鞏雞彌遣使詣闕。

開皇二十年は我が推古天皇の八年で十五年の遣隋使に先立つ事七年前である。開皇大業年間隋を始終惱したものは高麗であつた。數回の遼東の征も充分な結果を齎らさずして煬帝の晩年にも失敗を重ね隋は滅んでしまつた。太子の使が隋に發したのが七月（書紀に推古天皇十五年秋七月戊申朔庚戌大禮小野臣妹子を大唐に遣し鞍作福利を以て通事と爲す）であつたが、その頃隋では煬帝は八月北方に巡狩して突厥啓民の帳に幸してゐるが當時高句麗は隋に通ぜずして突厥に使者を遣してゐた。（隋書煬帝紀）

上、大業三年八月の資治通鑑隋紀炀帝上の西南角に押し蹙められてゐた。隋の遼東の征を試みた開皇十八年には百濟王昌（惠王）は使を遣し軍導をなさんと請うたのであつた。

〔資治通鑑〕 隋紀高祖下

百濟王昌遣使奉表。請爲軍導。帝下詔諭以高麗服罪。朕已赦之。不可致伐。厚其使者而遣之。高麗頗知其事。以兵侵掠其境。

數年後の大業三年には同様の態度を以て隋に使してゐる。

隋書 百濟傳

大業三年。璋遣使者燕文淮朝貢。其年。又遣使者王老鄰入獻。請討高麗。煬帝許之。令覘高麗動靜。然璋內與高麗通和。挾詐以窺中國。

百濟の遣使は妹子の使した推古十五年に二回あつた譯である。

かゝる麗濟の關係からして我が入隋使の航路は高句麗を避けて百濟に寄つた形跡がある。

推古十六年（大業四年）小野妹子、歸朝の際隋帝は文林郎斐世清を遣して送らしてゐる。隋書（倭傳）にその航路を記して「度百濟行至竹島至南望舳羅國經都斯麻回在大海中又東至一支國又至竹斯國又東至秦王國」となしてゐる。

竹島の位置を東國輿地勝覽によつて按ずれば、

全羅道古阜郡の條に

竹島 在郡西海五十五里、又見興德縣

同興德縣 竹島在縣水路七里

とあり、何れも全羅南道の西邊の一島嶼となつてゐる。

袖羅は耽羅と同じく今の濟州島であり、都斯麻は對馬、一支國は壹岐島、竹斯國は筑紫國である事は云ふまでもあるまい。

日本書紀に妹子が國書を百濟に於て盜まれた由を述べてゐるが、彼はこの航路は百濟に寄港した事を物語つてゐる。

三國史記百濟本紀に「武王九年春三月遣使入隋朝貢、隋文林郎裴世清奉使倭國經我國南路」とあるは隋書を材料として書いたものであらうが百濟の南邊竹島に渡るには山東方面より黃海を横斷したると思はれる。これは五世紀に於ける我が南朝との交通路であつた。

遣隋使の交路で幾分判明するのはこの推古十六年の歸路のみであるが北方高句麗の蟠居によつて百濟、新羅の遼東方面の航路が拒がれ勝であつた。百濟に依つて入唐する時この危険の多い渡海航路にやらなければならなかつた。隋書には猶大業四年三月に倭國が百濟國と同時に入貢した記事が見えてゐる。

百濟より南朝に至る黃海の横斷路に風波の難の多かつた事は勿論であつた。都合四回の遣隋使に續いて唐代舒明天皇二年八月、孝德天皇白雉四年五月同翠白雉五年二月齊明天皇五年七月天智天皇四年十二月同六年十一月同八年文武天皇大寶元年奈良朝以前に於ても遣唐使は殆んど歷朝派遣されてゐる。

これに入唐案内僧在唐留學生が多數渡つて彼地に止る者も多くあつたがこれ等の新歸朝者が我が國政の革新文化の向上に寄與した所又大であつた。隋唐以前の吾國と支那南朝との交通は百濟を通じて行はれてゐた事は既述の通りである。然るに奈良朝以前の日唐交通には新羅の仲介が著しくなつて來てゐる、今その書紀記載の實例を列舉するならば、

推古天皇三十年七月。新羅遣大使奈末智洗爾。任那遣達率奈末智。並來朝。仍貢佛像一具。及金塔并舍利。且大灌頂幡一具。小幡十二條。即佛像居於葛野秦寺。以餘舍利。金塔。灌頂幡等皆納于四天王寺。是時。大唐學問者僧惠齊。惠光。及醫惠日。福因等並從智洗爾等來之。

舒明天皇四年八月。大唐遣高表仁。送三田耜。共泊于對馬。是時學問僧靈雲。僧旻。及勝鳥食。新羅送使等從之。

舒明天皇十一年九月。大唐學問僧惠隱。惠雲。從新羅送使入京。

舒明天皇十二年十月。乙丑朔乙亥。大唐學問僧清安。學生高向漢人玄理。傳新羅而至之。仍百濟。新羅朝貢使共從來之。則各賜爵一級。

孝德天皇白雉五年二月。遣大唐押使大錦上高向史玄理。大使小錦下河邊臣麻呂。副使大山下藥師惠日。判官大乙上書直麻呂。宮首阿彌陀。小乙上崗君宜。置始連大泊。小乙下中臣間人連老。田邊史鳥等。分乘二船。留連數月。取新羅道。泊于萊州。遂到于京。奉觀天子。

新羅の隋唐への交通は目覺ましいものがあつた。眞興王代には東は漢江口邊に出で南は加羅諸國を

併せて支那交通の海路の發航地を得たのである。新羅より支那へ渡るに漢江口邊より出で遼東半島北部を経て入京する船路と新羅南海より南揚子江沿海地方即ち吳越に至る航路と南北二つの路があつた。北方航路は唐賈耽の方域道里數記に現れてゐる登州路がその代表経路である。即ち同記に四夷より唐京に入る路の最も重なるものを挙げその一に登州路があり、

登州東北海行過大謝島、龜龍島、淤島（中途地名は下に擧ぐれば略す）至新羅王城と説明してゐる。順次列記の地名を現在の地理に按ずれば次の如くなるであらう。

（西今龍氏新羅史研究所載「慈覺大師入唐求法巡禮行記を讀みて」）

- (1) 登州—今の山東省登州府治所在地 (2) 大謝島—長山島 (3) 龜龍島—砬磯島 (4) 淤島—大欽島ナラン (5) 烏相島—今の南黃城ナラン (6) 馬石山—老鐵 (7) 都里鎮—旅順附近 (8) 青泥浦—大連邊の小濱島邊青泥窪(道里攷實) (9) 桃花浦—畢利河口(道里攷實) (10) 杏花浦—花園口(道里攷實) (11) 石人江—莊河江口石城島の北にあり(道里攷實) (12) 臺駝灣—大坪河口(13) 烏骨江—大東溝(道里攷實) (14) 烏牧島—烏骨城(道里攷實) (15) 貝江口—大同江口 (16) 椒島—今も同名 (17) 長口鎮—海安面邊か (18) 秦王島—白翎島か (19) 石橋島—大青島か (20) 麻田島—海州郡延坪島か (21) 古寺島—江華郡喬相島か或は延坪島か (22) 得物島—德積島 (23) 唐恩浦口—水原郡南陽灣

是によれば今の山東省登州府治より出で廟唐列島を通過し遼東半島の西南端に達し、海岸に従つて東

し鴨綠江口に至り更に海岸に依つて平安道黃海京畿道の東岸諸島の間を縫つて南陽灣に入り、これより陸路新羅王京慶州に至るのである。この航路は唐羅間の最も安全な航路であつて従つて又迂回航路である。同じ北方航路でも大同江口南の黃海道の半島より山東半島の突角に航する路のあつた事も認めなければならぬ。彼の孝徳天皇の白雉五年向玄理等が新羅道をとつて入唐したのはこの北方航路と思はれ支那の上陸地は萊州即ち山島半島の北岸山東省掖縣である。新羅によつて結ばれた日唐航路はこの他に明に傳ふるものがないが新羅にも南方の航路があつた事は注意しておかねばならぬ。三國史紀新羅本紀眞興王十年春梁遣使與入學僧德送佛舍利王使百官奉迎興輪寺前路とあり早く南支那との交通を覗はせるものがあり、又三國遺事「皇龍寺丈六」の項に「新羅第二十四眞興王即位十四年癸酉二月將築紫宮於龍宮南有黃龍現其他乃改爲佛寺號黃龍寺（中略）至十七年方畢未幾海南有一巨舫來泊於河曲縣絲浦（今蔚州谷浦也）檢看有牒文言西竺阿育王」とあり、河曲縣は三國史記地理志によれば河曲一作縣西縣婆娑王時取屈阿火村置縣景德王改名今蔚州となし蔚州は李朝太祖の時蔚山郡と改められてゐる。古來新羅より日本或は南方支那に至る良港であつた事を示してゐる。絲浦即ち谷浦は蔚山灣頭の港であつた。

三國史紀新羅本紀「眞興王九年秋七月大吉仇深二人通海（中略）吾將乘浮泛海以至吳越（中略）自南海乘舟而去終不知其所在」とあり眞平王の頃この航路を探る新羅人があつた事を記してゐる。同じく大唐西域求法高僧傳によれば唐の貞觀の頃慧輪なる新羅僧も同じ航路によつて入唐してゐる。

〔大唐西域求法高僧傳〕新羅阿智耶跋摩法師傳慧輪師者新羅人也梵名般若跋摩自本國出家翹心聖迹汎舶而陵閩越涉步而届長安（下略）

南朝佛教との交渉は既に陳の世に初りを傳へてゐる。新羅僧玄光が海東熊州の人で陳の衡山（今の湖南省）に至り思大和尚に詔し錫江南より本國へ歸りし由宋高僧傳に記されてゐる。又同じ六朝末釋圓光なる新羅僧は二十五舶を金陵に造り渡海して南朝の寺佛を歴遊し、後歸國して皇隆寺に住したと〔續高僧傳唐新羅國 皇隆寺釋圓光〕新羅の佛教は初め高句麗を経て傳はつたと云ふが支那と直接の交渉を始めるや南方佛教の輸入が少くなかつた。その初期に於ては久しく政治的に南朝に附庸してゐた百濟の仲介が認められるであらう。政治界では反嚙をくりかへした羅濟間も宗教界では一心欣求の道に手を繋いで光道へ進んだ。

在唐の新羅僧の活躍は前掲の史料によつても覗はれるが貞觀年中には新羅僧阿離耶、跋摩玄太玄恪慧輪等は求法して西域天竺に迄入りしこと大唐西域求法高僧傳（卷上新羅阿離耶跋摩法師傳）に見ゆ熱烈なる信仰欣求の心は彼等をして風波の難を冒して大海を横斷せしめた。

新羅は支那との接觸に於て高句麗、百濟より遅れ間接の交渉多かりし爲外國文化の攝取に當つても多く固有文化の色彩を失はずにゐる。この點は我國に於て更に著しいものがある。今新羅の海外交渉から誘導された國情の變化を見る時吾が聖德太子以來の政治社會の革新の情勢と相通するものが見出さるゝであらう。以下その一二について比較を試みやう。

新羅には我が姓（加婆彌）に似た骨品の制があつた。新羅社會組織の中心は王族である事は云ふまでもないがこの王族には朴氏、昔氏、金氏、の三氏があつた。而してこの王族には聖骨と眞骨の二種の骨品があつた。

三國遺事王曆「眞德女王已上古聖骨已下古眞骨」

國師大朗慧和尚日月葆光塔碑によれば聖骨眞骨の他に六等品五等四等品の三階があつた事を記してゐる。

六等品以下の諸品は六村に關係あらんとは早く故今西龍博士の想像された所である。遺事に朴氏夫人の出身地を牟梁部と特記せるより朴氏と牟梁部との關係を見出す事が出来る如く、金氏も又牟梁及沙梁部と特殊の關係を結んだのではないかと考へられる。牟梁部は即ち今の慶州面沙梁部は即ち今の南山方面に當り當時新羅國家の中樞たる慶州平野の中心に位し初代諸王の都した所と思はれるからの關係を生じたものであらう。眞興王拓境碑に現はれてゐる諸人名中叵干以上即ち史記に云ふ眞骨のみ受ける官位にある喙（梁）及び沙喙（沙梁）の部名を冠する者に限られ他は部名は彼の昌寧の拓境碑に本波末國智及尺干の名一名を見出すもその位は第九位である。梁或は牟梁部の長が王族金氏と血縁的に合體する事は最も自然であり又その場合貴品を採り舊品を捨てる事もあり得べき事である。勿論斷定的の引證を缺ぐが思ふに四等品以下の欠品はかくして貴品と合體して失はれた結果ではあるまいか。

法興王の七年には色服の制が定められた。

三國史記「法興王七年春正月頒示律令始制白官公服朱紫之秩」

三國史記「色服志新羅之初衣服之制不可考色至第二十三葉法興王始定六部人服色尊卑之制（中略）」

法興王制自大角干至大阿淦紫衣阿淦至級淦緋色並牙笏大奈麻奈麻青衣大舍至先祖知黃衣伊淦匝淦

錦冠波珍淦袴緋冠上堂大奈麻赤位大舍組纓

こゝに六部の人の色服を定めたとあるが骨品が六部の人に限られし如く官位も亦六部の人にのみ與へられたと思はれる。此處に新羅國家の限られた特異性が存する。法興王の色服制定後九十一年を経て我國の推古天皇の十一年に冠位の制が行はれた。又新羅に律令が制せられたのであるがその律令たる語に表された内容は明かでないが法興王制律の事は三國史記編纂以前羅末崔致遠撰の鳳巖寺智證大師寂寶塔碑文に次の句がある。

「阿度干我如康會南行時迺梁菩薩帝反同泰一春、我法興王制律條八載也」阿度は三國史記及び遺事にある阿道一作我道和尙で兩書の傳ふる所は新羅二十一代毗處王の時阿道あり新羅一善郡に來るとある。

その年代については明記がないが「海東高僧傳」卷一流 通阿道に「按古記梁大道元年三月十一日阿道來至一

善郡」とあり、梁の大通元年是法興王十四年に當り法興王七年を入れて數へて八載となりこの時に成文の法典が出来た事が覗はれる。猶これより三十四年後太宗王の元年に良首星に命じ律令を參酌して理方府格六十余條を脩定せしめてゐる。（三國史記新羅本紀太宗元年の條）

我國の成文法の初は聖徳太子の十七條の憲法に求めらるゝが新羅の律命におくるゝ事八十余年である。又法興王初めて年號を建て即位二十三年を以て建元元年となした。法興王建號については磨雲嶺及び黃草嶺の眞興王巡狩碑に「天純風不扇則世道乖眞玄化不敷則邪爲交競是、以帝王建號莫不脩己以百姓云々」の句があり又その冒頭には「太昌元年歲次戊子八月二十一日癸未眞興大王巡狩管境刊石銘記也」（朝鮮史第一編第一卷による）とあり太昌元年は眞興王即位二十九年戊子の年である。遺事によつて新羅の年號を擧ぐれば次の通りである。

三國遺事 王曆 第一 二十三法興王 建元丙辰 是年始置(十六年) 年號始此 二十四眞興王 開國辛未 十七年 大昌戊子 四年

年 鴻濟壬辰 十二年 補 (二十六眞平王 建福甲辰 五十年 二十七善徳王 仁平甲午 十三 28眞徳大和丁未 三)

我國の年號は法興(元年は崇峻天皇即位四年に當る)等の私年號早くより用ひられたが公に使用されたのは大化を以て始めとする。百濟に於ては自國の年號はなかつた様でその年號名を止めてゐない唐の文化を輸入すると共に特種の年號を建てた所に國家の獨自性が認められる。新羅は眞徳女王の代唐の命によつて唐の年號を採用する事となつた。

三國史記「眞徳王二年冬使邯軼許朝唐太宗勅御使問新羅臣事大朝何以別稱年號軼許言會是天朝未頒正朔是故先祖法興王以來私有紀年若大朝有命小國亦何敢焉太宗許之同四年是歲始行中國永徽年號」

これと同じく前年色服も唐制に改められ新羅の固有文化は失はれ唐國の余流を受けるに至つた。色服改訂の事は三國史記に「眞徳王三年春正月始服中朝衣冠」と見えてゐる。この年は我が孝徳天皇の

大化五年に當りその翌々年即ち白雉二年新羅國使唐服を付け新羅朝貢使來りしを追ひ返せし記事が日本書紀に見えて右の史記の文の事實なるを證してゐる。

日本書紀「孝德天皇白雉二年是歲新羅貢調使知万沙滄等著唐國服泊于筑紫朝廷惡恣俗訶噴追還」

又齊明記に引く日本世記の註に「新羅春秋習不得願於內臣蓋金。故亦使於唐。捨俗衣冠。謂之天子。投之响於國。而稱斯意行者也。」とある。

かくして新羅の法興王より眞興王にかけての時代は我國に於ては約半世紀遅れた新國家組織の發生期新文化建設の時代であつた。唐國の外國文化を享けながらも而も固有文化を保持しつゝ同様の道を辿つて行つた。新羅は眞徳女王の頃既に一時唐風万能の氣風が見えたが其の頃我國では漸く聖徳太子によつて従來の大和民族の個性に立脚して外來文化を獨自の見地より攝取しつゝあつた事を注意して置かねばならぬ。

新羅によつて結ばれた日唐航路は新羅が唐と聯合して百濟を滅す頃から一つの轉換期にのぞんだ。齊明天皇の即位五年七月に坂合部連石布津守連吉祥等の二船が遣されるのであるがその經過については同行の伊吉連博徳の日記とも云ふべき記録が齊明紀に註記されてゐる。今これを列記すれば

・齊明天皇五年七月三日 難波三津の浦を發船す

八月十一日 筑紫大津の浦（博多）を發す

九月十三日 百濟の南の畔の島に至る。島名不明

九月十四日 寅の時二船大海に離れ出づ

十五日 日没の頃石布連の船は逆風に遭ひ後南海の島に漂着す。島の名は爾加委と云ひ島人の爲に殺される者多し。東漢長直阿利麻等五人島人の船を盗み括州に到り洛陽に送らると云ふ

十六日 夜半吉祥連の船越州會稽縣(浙江省興紹府會稽縣)の須岸山に到る

廿二日 餘姚縣(浙江省興紹府餘姚縣)に到る

潤十月一日 越州府治(興紹府)に到る

十五日 驛に乗つて東京(洛陽)に到る

こゝに遣唐船は百濟南邊の一島より直西に黃海を横斷して揚子江口に到らんとする壯學を試みたのであつた。

この頃北方では連年高句麗は唐の兵と戦ひ南方では百濟と攻略を繰りかへし新羅は唐の援助を求めてゐた。唐は新羅を助けて高句麗を狭撃しようとの意嚮が見えた。かゝる事情の下にあつて我が遣唐使は半島の運命の歸結を決する政治的の使命が多分にあつたとみななければならぬ。こゝに新羅の力を借らずして獨力大海を横ぎるの壯圖が敢行された。然しその一船は逆風に見舞はれ漂濤流離し南海の偏島に吹き寄せられたが島人の爲に多く命を隕したと云ふ。難波吉士男人の手記によれば大使は漂没し副使が高宗に謁して蝦夷を示し奉つたと云ふ。

この年の暮韓の智興の僭人西漢大麻呂の爲に我が使客は讒せられ様としたが伊吉傳徳の奏言によつて事顯れ一旦許されたが新羅の求援は唐を動かして終に百濟攻略を快した。よつて我が使人等は別所

に幽閉の身となり苦難の年月を過した。即ち顯慶五年三月唐は神丘道軍を發して新羅と共に百濟を討ち唐將蘇定方等百濟義慈王、太子等を捕へた（舊唐書高祖本紀）

百濟の征止んで七年九月十二日博德等赦され西京より洛陽に入つたが恰も蘇定方に捕へられた百濟王以下王族諸將が哀れ唐朝に引かれ行く姿を見たのであつた。

十一月廿四日洛陽を發して彼等は歸國の途に就いたのであるが往路と同じく越州より百濟南島を目ざして再び大海を乗り切つてゐる。

辛酉年（齊明天皇七年）正月廿五日還りて越州に至る。

四月一日 越州より上路して東に歸る

七日 檉岸山の南に至る

八日 鷄鳴の時を以て西南風に順つて船を大海に放つ。海中途に迷ひ漂蕩辛苦す。

九日 八夜の後漸く耽羅島（濟州島）に到る。

五月廿三日 筑紫朝倉の行宮に到る。

博德等の歸國の當時は百濟の求援によつて齊明天皇は筑紫朝倉の橘廣庭宮に西下せられて海表の軍政を覽はせられてゐたのであつた。

